

## 若い人の死を扱った〈朝長〉と〈隅田川〉

三宅 晶子

〈朝長〉は、修羅能の形式が踏まえられているが、本説を『平家物語』ではなく『平治物語』とし、平治の乱における敗者たちの様子を描く、重苦しく暗い能となっている。観世元雅作が現代では定説となっている。

源朝長は、平治元(1159)年十二月二十八日夜、美濃の国青墓の宿で最期を遂げる。弱冠十六歳であった。舞台は翌年の春のある日、まずこのせいぜい死後三か月後という設定は重要であろう。負け戦により、源氏方は諸国に影を潜め、平家による支配が始まっている。世阿弥の修羅能は、本説紹介の物語を効果的に見せるために、甲冑姿の亡霊を登場させ、懺悔語りや修羅道の戦いを見せるが、最終的には成仏できる構図で作られている。更なる供養を願って姿を消す(美盛)でさえも、供養を依頼するためにシテが選んだのは、称名を唱える所には紫雲が棚引くような説法をする遊行上人である。この人の法力なら大丈夫だという雰囲気は漂っている。世阿弥の作品は、基本的には祝言で終曲となる。「当世何事モ祝言ヲ以本トスル」(『五音曲条々』)という考え

方が諸曲に反映しているのであろう。

一方〈朝長〉では、ワキは清涼寺に居たといえ、徳の高い本職の僧侶ではない。別れて十余年、かつて傅であった者、つまりは育ての親が墓所を訪ねる(下掛り系は乳母子とする)。平家方の眼を盗んで密かに訪れているという設定にも、悲哀感が漂う。最期を看取って供養を続ける青墓の長者(前シテ)といい、ひっそりと生きている庶民の悲しみを描く能である。朝長の亡霊(後シテ)は法華懺法に引かれ、供養に感謝して出現するが、そこで語られるのは、長兄義平の処刑、弟頼朝の捕縛、父義朝の家人による謀殺、そして最期の一夜の宿を貸しただけの縁で、手厚く弔ってくれる女主人への謝意である。裏切りもあつて迎えた一族の悲劇的な結末と、人の情けの有り難さという内容から見て、源平合戦の華々しい本説紹介の物語が、そのまま懺悔語りとなつていゝ世阿弥の修羅能とは、作能の目的が異なつていゝ。描きたいのは人間の背負う運命の非情さと、人生において出会う人と人との絆であろうか。長者の弔いによつて、朝長の「魂」

だけは善所に赴いている。

今暫く「魂」は修羅道に留まらなければならぬのだが、その苦患を演じてみせる「中ノリ地」で演じられるのは、膝口を馬の腹ごと射貫かれたことであり、退却した後の切腹である。華々しい戦語りとは程多い。中有に迷うこともなく修羅道に直行、亡骸はその場所へ葬られた。「亡き跡弔ひて賜ひ給へ」と合掌して終わるが、はたして傅だった男の力で、朝長の魄は救われるのであろうか。世阿弥の能と違つて、祝言的雰囲気終曲とはなつてはいない。同じ十六歳の主人公(敦盛)との、決定的な違いである。

この後朝長の亡霊はどうなるのだろうか、青墓の長者はこの地で供養し続けるのだろうか、傅はどうするのだろうか。これからの気になる終わり方をしていゝ。そのようなことに考えが至つたとき、次のことが思い浮かんだ。〈隅田川〉と〈朝長〉は似ている。

〈隅田川〉では、①母が我が子の行方を尋ね、隅田川のほとりにやってくる。②渡し船の中で船頭から、我が子の一年前の死の情報を聞く。③我が子を弔う大念仏の場で、子供の亡霊が登場する。④夜明けと共に亡霊は姿を消し、終曲。一方〈朝長〉では、①傅が朝長最期の場所、青墓を訪ねる。②墓所で長者から、朝長最期の様子を聞く。③傅の法華懺法の場に、朝長の亡霊が登場、感慨を語る。④修羅の苦患からは脱することなく、供養を願つて

終曲。配役を無視して役割だけを当てはめると、(隅田川)と(朝長)で、船頭(ワキ)と青墓の長者(前シテ)、母(シテ)と旅僧(ワキ)、子供の亡霊(子方)と朝長の亡霊(後シテ)が対応する。ある場所を訪れた者が、土地の者から大切な人の最期の様子を聞き、供養する場にその人の亡霊が現れる。特に②は、本人ではなく死に直接関わった人から衝撃的な情報を与えられる。まだ幼い、まだ若い人の死、しかもそれは遠い昔ではない。③の大念仏や法華懺法という宗教的儀式の場に、死者の霊が出現する。物狂能と修羅能という分類概念を越えた共通性が看取される。

さらに注目したい点④である。『申楽談儀』における(隅田川)の子方論議で、元雅は子方を出さなければ出来ないと主張した。黒頭の幽霊姿で登場する方法が、元雅時代行われていたか否かは確認できないが、「面影も幻も、見えつ隠れつする程に」(8「哥」と描写されているから、ありし日の可愛い我が子の面差しと、幻に見える現在の姿が交錯していることになる。姿を見せたのは地獄で苦しむ子供幽霊である。この出現の仕方は残酷である。しかも手に触れることも出来ず、夜明けと共に見えなくなってしまう。実際に子方を出すことで、疑問の余地のない現在の状況、子供は死んで地獄に堕ちているということを、母に、そして観客に突きつけるのである。

この後、この母親はどうするのだろうか。

元雅は、子供の亡霊との対面、それを大念仏によって引き起こされた奇跡であり、大念仏に参加した人々全てに起きた共同幻想として捉え、夢ではない出来事として作り上げた。そして夜が明けて能は終わる。この後母がどう生きていくのか、子供は成仏出来るのか、明確な答えはおろか、暗示とか雰囲気さえも与えてはいない。出会えたことで、行方捜しの旅には終止符が打たれ、母の人生の一頁がめくられたことは事実であろう。事実を受け止めて、明るく前向きに生きていくという解決法もある。したたかな女性像として面白いが、ちよつとクール過ぎる選択かもしれない。本当の狂人となってしまうということもあり得る。信仰に生きることを予想するのが一般的であろうか。塚のある地に留まり、菩提を弔って余生を過ごす。あるいは形見の品を抱いて遙々帰っていく。悲劇に埋没して心を閉ざして生涯を終えるのではなく、強く生きて欲しいと願わずには居られない。勝手に思いを廻らせずにはいられないほど、悲しすぎる結末である。元雅は夜明けを迎えることで幕を引いてしまい、その後について暗示すらしていない。突き放したような終わり方である。そこが(朝長)と似ている。

実は(弱法師)も同じような傾向がある。日想観による奇跡の結果、俊徳は入り日に染まる難波の浦の風景をまざまざと観じる。この高揚感の後、盲目の弱法師であるという現実

直視の落胆があつて、父との出会いへと展開する。父の出現によって生活面の心配は無くなるのだから、本当の救いではなさそうである。俊徳は自分の姿を父親に恥じているし、父は俊徳を伴つて故郷に帰るのに、人目を憚つて夜が明けないうちにと、急いでその場を離れるような人である。俊徳はこの後どのように生きていくのだろうか、幸せは訪れるのだろうか、心配してしまう。元雅は救いとなるような終わらせ方をしていない。

(盛久)の場合も、清水観音の慈悲の力で処刑寸前に刀が折れ、頼朝によって救済されるのだが、源氏の世で平家譜代の侍が、どうやってこれから生きていくのだろうか。

元雅は三十代前半でこの世を去っているのだから、手掛けた能はすべて、早くて少年期後半、遅くても青年期前半に作ったものということになる。仏教的な奇跡を扱う個性的な秀作が多い。奇跡への憧れがあるのだろうか。その一方で、奇跡による幸せは信じていない。人の世において重要なのは人の生き様であると考えている。考えているが、大きな出来事と対処した後、どう生きていけば良いのかという答えはまだ出ていない。大団円では終わらせないとところが魅力的だし、幸せ感とは無縁で、通奏低音のように暗さが響いていながら、健気でひたむきな主人公達。突き放したような結末は、若さ故の潔さであろうか。

(横浜国立大学教授)